

Title	モンゴル時代チベット交通史研究：駅伝の利用実態と設置過程の検討を中心に
Author(s)	山本, 明志
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59370">https://hdl.handle.net/11094/59370</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	山本明志
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第25329号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	モンゴル時代チベット交通史研究 — 駅伝の利用実態と設置過程の検討を中心に —
論文審査委員	(主査) 教授 森安 孝夫 (副査) 教授 荒川 正晴 教授 桃木 至朗 駒澤大学准教授 中村 淳

## 論文内容の要旨

本論文は、モンゴル帝国～元代にチベットと中国本土の間に設置された駅伝と、その駅伝を利用して往来したチベット仏教僧の動向が、散発的で断片的とはいえ漢文史料とチベット語史料の双方に残存している点に着目し、ジャムチと呼ばれる駅伝制の実態と、当該時代におけるチベットの政治状況の解明をめざしたものである。

序章では、まず当該時代に関わるチベット史研究と交通史研究の研究史を概観する。その上で、特に史料の成立年代の新旧を無視した従来のチベット史研究の方法を批判し、それを乗り越えるために、基礎となるチベット語史料に関しては15世紀中葉を目安として、それ以前に編纂された文献にのみ立脚する本研究の独自性を示す。

第一章『永楽大典』所収『経世大典』站赤門にみえるチベット人僧侶の駅伝利用」では、これまで十分に活用されてこなかった漢文政書類の駅伝関係記事に基づき、チベット人の駅伝利用の実態を検討する。まず、『経世大典』等の政書類に収録される諸案件の年代偏差を明らかにし、その上で、チベット人の駅伝利用に関わる案件群を分析した。駅伝交通は、本来官員の往来の便宜を図ることを第一の目的とするものであるが、その制度が史書に明記されているわけではなく、制度に違反した時の処理案件が残されているだけである。申請者はそれを丹念に分析することによって、モンゴル時代においては、官員ではないチベット人僧侶が、首都(中都・大都=北京, 上都)にいるカアン(皇帝)をはじめとするモンゴル皇族が主宰する仏事に参集するため、またモンゴル皇族から獲得した布施をチベットへ運び込む手

段として、数人～十数人のグループとなって駅伝を頻繁に利用していた事実を明らかにした。

第二章「チベットにおける駅伝の設置」では、1434年に成立したチベット語典籍である『漢藏史集』を利用し、チベット在地における駅伝の設置過程について考察した。チベットにおける駅伝の導入は、従来先祖クビライ期であるとされてきたが、その根拠となる史料の記述に矛盾があることを指摘し、それ以前の憲宗モンケ時代にその導入があったことを論証した。また『漢藏史集』に見える二種類のチベット在地の駅伝名リストには時代差があることを明らかにし、シリギの乱・カイドウの乱といった13世紀末の中央アジア情勢の緊迫化に伴ない、西部チベット方面へ駅伝路が延長された結果、初置段階と延長後の二つの駅伝名リストが残ることになったと結論づけた。

第三章「13・14世紀モンゴル朝廷に赴いたチベット人をめぐって」では、『漢藏史集』に収録される「タクナ=ゾンパの歴史」、14世紀に成立した『紅史』『ヤルルンジョウオの仏教史』等のチベット語典籍史料に見える、モンゴル時代に入朝したチベット人の記事を検討した。まず、入朝者の多くは朝廷から招請された高僧の「チャクチ(phyag phyi)」と呼ばれる侍従職に就き、高僧とともに駅伝を利用していたことを指摘した。そして入朝者たちは、朝廷で領地安堵の特許状を拝領している事実を明らかにした。

終章では、本論の結論を踏まえたうえで、モンゴル時代になると、チベット人はモンゴル政権が設置した駅伝を利用して首都へと赴くことになり、モンゴルによる交通制度の整備が、チベット人を大々的に外部へ赴かせる要因となったと指摘する。モンゴル時代にチベット社会は、行政等の面においてモンゴル政権の大きな影響をこうむるが、その一方でモンゴルがもたらした交通制度を、チベット人僧侶およびそれと密接に結びついた在地有力者層が、自らの利益となるように有効に活用していたと結論づける。

## 論文審査の結果の要旨

モンゴル時代(13～14世紀)の歴史を理解するうえで、ユーラシア全体に広く張り巡らされた駅伝(ジャムチ)制度を解明することが必須であることは、学界でも一致した認識である。一方、元朝史にとっては、チベット仏教勢力の果たした役割を、過大ではなく正当に評価することもまた重要である。本論文は、モンゴル時代のチベット史を、とりわけジャムチに代表される交通という視点から論じようとしたものである。その大きな特徴は、モンゴル語の影響を受けた白話体や史読体など正統漢文とは違う難解な文章を含むジャムチ関係の漢文史料を読み解くのみならず、時代が降って情報量が多い典籍の利用を避け、情報量は少ないが成立年代が古い複数のチベット語典籍史料を同時に、かつ適切な史料批判を加えながら本格的に扱った点にある。このような特徴を持った研究は、従来、世界中を見わたしてもなかったもので、それだけでも高く評価できる。

特に注目に値するのは、チベット語の『漢藏史集』に見える駅伝設置の記事を検討して、二箇所に現れる二つのチベットの駅伝名リストの由来を探り、一つは1250年代のモンケ時代の駅伝名リスト、もう一つは1287年の戸口調査をうけて作成されたリストであることを明ら

かにした点である。その中間の 1260 年代に、パクパの第一回サキヤ帰還にともなってチベットの駅伝が整備されたと伝える記事の扱い方についてはまだ問題が残るが、1270 年代に入り中央アジアの反クビライ勢力がチベット西部に侵入するという情勢に対応して、モンケ時代に中国本土から中央チベットのサキヤにまで敷設されていた駅伝路が、さらに西部チベットのガリー方面にまで延長されたことを論証したのは見事である。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。